波打つような縁や立体的な突起は、縄文土器の特徴と言われています。「鍋」としては使いづらい、この特徴に、縄文人はこだわったようです。

使い勝手の良さに慣れた私たち現代人とは、異なる感覚を持っていたことがわかります。

古墳時代（約 1700～1400 年前）の土師器は文様が付いていません。

煮炊き用の「甕」、貯蔵用の「壺」、盛り付け用の「杯・鉢」など、機能に直結した形をしていて、私たちの使う「茶碗」や「壺」に似た形をしています。

今日、「顔」に見える縄文土器の突起を手がかりに、文様を読み解きました。

中空突起や小突起を「顔」、そこから「S」字状にのびる粘土紐を長い胴体 - 蛇体 - に見立てると、1 体の「生きモノ」が浮かび上がります。鼻筋にヘビが這う三輪仲町遺跡の中空突起から考えると、彼らは実在の生き物ではなく、縄文人の精神世界の「生きモノ」と思われます。

文様の違いからは、「生きモノ」に種類やランクがあったことがうかがわれます。名前もつけられていたことでしょう。

土器は、文様に篭めた縄文人の世界観を映しているのです。

公益財団法人 とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
入館無料　9：30～16：30（最終入館 16：00）
住　所　〒329-0418　栃木県下野市紫 474
連絡先　☎0285-44-8441(休館日　土曜日・祝祭日)
E-mail:webmaster@maibun.or.jp
http://www.maibun.or.jp

縄文土器 文様 を読み解く

こめられた縄文人の思い

縄文土器

今から 16,000～2,400 年前、日本列島で作られ、使われていた土器です。ほとんどが煮炊き用の鍋の役割を果たしました。

縄文土器によって、「煮る」ことができるようになり、自然界にある、多くのものを食材とすることができました。食料事情の安定に一役買ったのです。

土器には、縄（撚り紐）を転がして付けた「縄文」のほか、様々な装飾が施されています。

土器が語る　縄文人のヒストリア

文様は、写実的な表現を好まない縄文人が、彼らの流儀（表現方法）で土器に描いた物語だという解釈があります。文様を見ても私たち現代人には、にわかには意味がわかりません。しかし、まれに、「何かが描かれている」ことがわかる文様があります。こうした文様をヒントに、上の 4 体の縄文土器の文様を読み解いてみます。

栃木県埋蔵文化財センター

縄文人の思いを読み解く

土器が語る縄文人のヒストリア

顔面突起の付く土器　縄文時代中期

浄法寺（じょうほうじ）遺跡（那珂川町）　今から 4800 年ほど前

正面に顔に見える大きな突起（桃色）、その下にはトンボ眼鏡のような小さな突起（緑色）から横にのびる文様があります。

正面の「顔」（桃色）は蛇体の「生きモノ」。裏面の「顔」（水色）との間は、小突起などで表現された「生きモノ」（緑・黄・橙色）が取り巻いています。

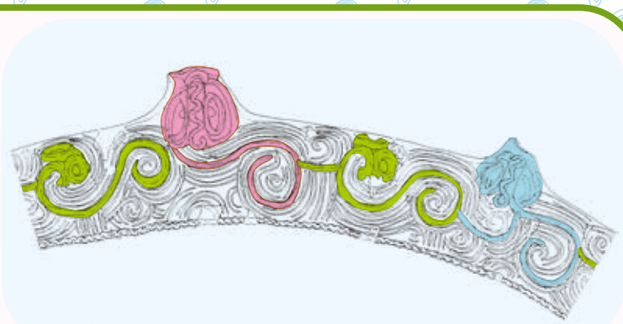
「主（ヌシ）」（桃色）、「次ぐモノ」（水色）、「従うモノ」（緑・黄・橙色）と読み解きました。

中空突起の付く土器　縄文時代中期

三輪仲町（みわなかまち）遺跡（那珂川町）　今から 4850 年ほど前

蛇行する粘土紐が付けられた正面の突起と真横のトンボ眼鏡状の小突起（緑色）は、「S」字を横に倒した文様でつながっています。

正面の突起は 2 つの目と蛇体の「主（ヌシ）」（桃色）。鼻筋にヘビが這います。裏面は「次ぐモノ」（水色）。トンボ眼鏡状の小突起は「従うモノ」（緑色）でしょうか。「主（ヌシ）」を先頭に、「次ぐモノ」・「従うモノ」が前足で繋がると読み解きました。



小突起の付く土器　縄文時代中期

三輪仲町（みわなかまち）遺跡（那珂川町）　今から 4850 年ほど前

トンボ眼鏡状の小突起（緑色）から、「S」字を横に倒したような太い粘土紐がのびています。同様の装飾が、４つ付けられています。

トンボ眼鏡状の小突起の「S」字を横に倒したような文様は、上の２つの土器にもつけられています。「主（ヌシ）」や「次ぐモノ」はいませんが、「従うモノ」でしょう。ヘビのような想像上の「生きモノ」と読み解きました。

トリの突起の付く土器　縄文時代後期

八剣（やつるぎ）遺跡（壬生町）　今から 4300 年ほど前

トリの顔のような突起がついています。その背には、蛇行する粘土紐がつけられています。まるでヘビが這うようです。

上の３つの中期の土器に比べ、非常に写実的な文様がつけられています。

トリは、同種の類例に「猛禽類」と想像できるものがあります。

背を這うヘビは、「シマヘビ」や「アオダイショウ」に似ていませんか。